

## 2 淀姫神社西の門

社殿のすぐ西に四足門がある。原材は楠くすを使っているが、垂木たなや棟木むなぎ等の腐朽により、たびたび修理がされたようで、杉材が使用されており、瓦もほとんど変わっている。

昭和四十八年にも大修理をされたが、柱その他の楠材は創建当初のもので、西の門の原形もほとんど変化がないようである。専門家の鑑定によると室町後期むろまち（約一四七〇以降）の創建という。

西門棟木写（かつこ内は註釈）

奉造立肥前国第一宮河上淀姫大明神西ノ門一字

大宮司千葉別駕平胤連

座主兼執行權少僧都増悦

立造寺（龍）太郎四郎藤原鎮賢（政治家）

大檀那

神代刑部大輔武邊長良（勝利の嫡男）

願主蓮乘院増純

元亀四歳癸 西 三月吉祥日

右の文書によれば西の門は約四百年前の元亀四年（一五七三）に創建された町内で最も古い建物であることがわかる。



淀姫神社西の門

## 八 橋 梁

### 1 官人橋

明治十三年七月「長崎県より河上川筋かわすじ二付而之間答書」の中に「河上宿の上、桜馬場の辺より井樋口いびくち下まで河中に細長き島有之これあり、支河の姿に見たり、成富創業の時はこの島はなかりしもいふ。都渡城宿よりこの島に仮板橋を架しかり（旧曆九月より五月まで之をかく）、この島より桜馬場の南詰みなみづまにかけたる長短一聯れんの橋を勧進橋かんにんしといふ。この橋も寛文のところまでは今の場所より数十間水上みなみかみに、都渡城宿へ桜馬場より直ちに土橋を架したり……」とある。

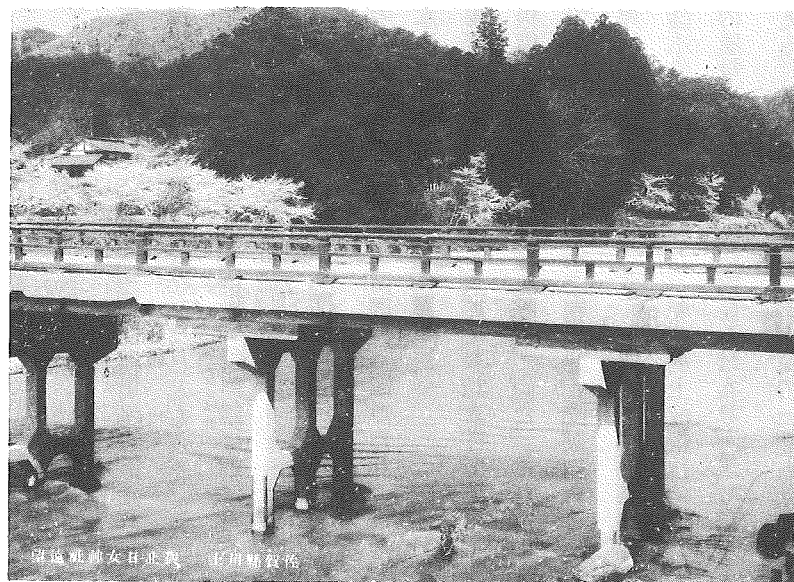
昭和二十四年の水害までは桜が一面に植えられた中の島が勧進橋の上下に細長く横たわり、東側で嘉瀬川に通ずる本流と、西側で一いびの井樋いびに通ずる芦刈水道あしかりとに分水していた。

この中の島も寛永のところ（一六二四ころ）成富兵庫茂安の水利工事によってできたようで、川上宿から都渡城に通ずる橋はこの島を中継した長短一連の板橋で、これを勧進橋と呼んでいた。それは旧九月の淀姫社例祭から免田の納米、三月の実相院お経会まじりあひ、更に五月淀姫社例祭と利用し、雨期に入る六月ごろから八月ごろまでは渡し舟による以外なかったようである。

元禄（一六八八——）のころ、佐賀藩のお抱え絵師小原友閑齋が描いた「肥前河上淀姫社の図」（本書巻頭に写真掲載）は桜馬場の桜が満開した四月ごろの風景で、中の島に板橋がかけられ、又、約二十段の石段を登った高台に淀姫社の境内があり鐘楼も見える。又大楠の向こうに実相院の一部も見えている。



雪の勸進橋（明治末期）



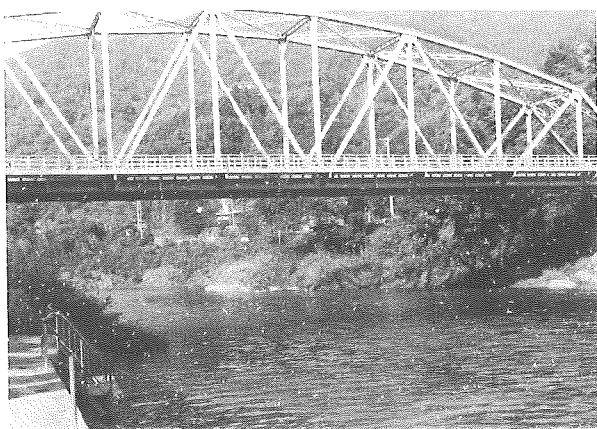
官人橋（大正時代）

現在と比較して、より荘厳であり興味ある絵である。（県立博物館所蔵）後世になってこの板橋も土橋になり、それがコンクリート橋に変わったが、更に昭和二十四年の水害によって流失したので、場所も元の橋より約八十メートル上流の現在地になり、

鉄製の吊橋が昭和二十八年三月完成した。  
勸進橋の名称は葉隠聞書にも見られ、天明五年（一七八五）河上神領絵図面にも勸進橋と記載しており、又明治三十九年九州沖繩八県聯合共進会の時、協賛会が出した佐賀県案内には勸進橋と明記しているから、官人橋と書くようになったのはそれ以後で、大正時代以後ではないだろうか。

## 2 名護屋橋

豊臣秀吉が征韓のため、この地を通過したのが今から約三百



現在の官人橋

八十年前の文禄元年（一五九二）である。その日はあいにくの大雨で、川上川は氾濫し渡河に困難を極めた。鍋島直茂は尼寺宿で秀吉の軍をねぎらい、急いで船橋を作り秀吉の軍を渡した。以来名護屋橋と称するようになったと「普聞書」に述べている。

従来渡船場であったが、明治十七年九月、その筋の許可を得て尼寺村と平野村協同の賃取橋を架設し

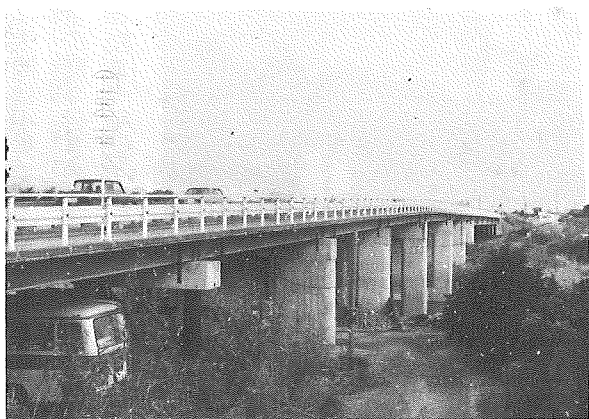


昔の名護屋橋の橋柱。  
上方が尼寺側、下方が  
平野側

た。その時の標柱が平野側のは平野の白山妙理権現社に、尼寺側のが尼寺の印鑰社にそれぞれ保存されている。

明治四十年県費支弁となり、同四十二年の洪水で流失したので再び架設した。橋長三十二間（五七・六メートル）、幅一間（三・六メートル）の木柱の土橋で、現位置よりやや上流、大和中学校前の県道を東に延長したくらいの位置に架し、渡り終えてから南に下り、更に左折して祇園土井にたらたら坂を登って行った。川上川兩岸の堤防は今のようになくなっていたので、橋の高さも低かったが、西側の堤防は比較的高かったため、佐賀の町の野菜市場へ出す荷車（当時はほとんど車力）は一人では登れなかった。だから連れの者と協力したり、家族の誰かが後押しのため、ここに更に祇園土井まで行くのが通例であった。

橋の付近の道の両側には大きな棕の木が栄え、夏は涼しい緑陰となり憩いの場でもあった。



現在の名護屋橋

この橋も昭和二十年の洪水で流失し、この橋よりやや下流にコンクリート橋が出来たが、これも同二十四年の洪水で倒壊したので、西側の堤防を更に高め、橋脚を高くしてコンクリート橋とし、東側は祇園土井まで陸橋や長堤でつなぎ、又同四十六年三月橋の南側に歩道・自転車道がつけられ今日に至っている。

#### ○ 慶間尼と握り飯

慶間尼は龍造寺胤和の長女で隆信の生母であり鍋島直茂の継母である。豊臣秀吉が母の病気のため東上、ついで下向の際、名護屋の渡しを通った時のことである。慶間尼は秀吉一行の接待のため、近所の農家から戸板を借り出し、青竹四本を立てて戸板をのせ、飯を固く握って土器に盛り、尼寺の道筋道端に出し置くように侍達に命じた。秀吉は通りがけにこれを見て「これは龍造寺が後家（慶間尼）の働きに違いない。食物のない道筋で上、下難儀なところをこの心掛けは奇特である。」といて自ら握り飯を手に取り「武辺の家は女までこのように心掛けている。この固い握りようを見よ、土器まで立派だ」とほめたたえ、陶師を名護屋へ呼び寄せて諸将の用器を製作させ、肥前の焼物師の司であるという朱印状（免

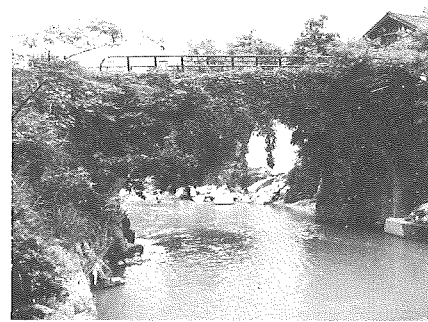
状)を与えた。その御朱印状には

土器手際無比類 於九州名護屋可為用者也

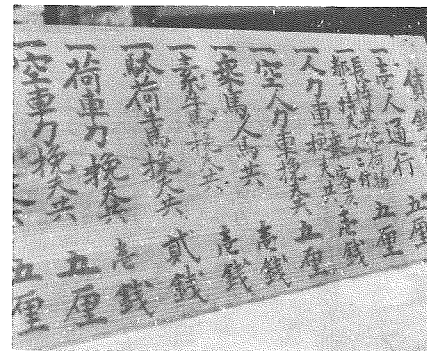
土器師 家長彦三郎

二十一日 御朱印

とあり、この陶師は高木瀬町瓦屋敷の家長彦三郎といった。秀吉一行が通過したとき、見物した者が、「大閣たいかくは小男こなこで眼まなこ大きく朱しゆをさしたよつで、顔の色、手足まで赤く、華やかな衣裳いさうを着て足半あしなかをはき、金の熨斗のし付きの大小の朱鞘しよざうを指し、刀の鞘にも足半一足結び付け、馬上の御旅行でお供ともにも駕籠かごに乗った者は一人もいなかった。」と話している。(葉隠聞書より要約)



三反田の眼鏡橋



渡瀬橋の賃銭表 (川上小蔵)

### 3 眼鏡橋(三反田)

寛永十一年(一六三四)支那の僧如定が長崎在住の折り、支那式拱橋こうきうの架橋を伝えたといわれている。三反田の眼鏡橋はその工法によって出来たもので、明治二十七年(一八九四)松梅村長 野田俊吾の時代に竣工した。当時の工法としては画期的なものといえよう。この橋を渡って

行くのが昔の旧道である。又、八反原の国道三三三号線にも眼鏡橋がある。

### 4 渡瀬橋(平田橋)

この橋は川上地区から佐賀市へ行く近道であるが、昭和初期まで渡し賃を取っていた。(昭和八年ごろ三銭)、ここに掲げた渡し賃標板は江戸末期から明治に至るころのものと思われる。(川上小学校所蔵)

## 九 地名の由来

地名の由来を調べてみると、その置かれている地理的關係、地形的關係、歴史的關係等何らかの關係があるようで興味深いものがある。例えば福田、檀田、平田、東西山田、上下戸田、下田等は水田に關係があり、三反田、八反原は地積の広狭を表わした地名ではないだろうか。北原、萩原、井手原、江熊野、西野、野口、平野、等「原」「野」の付いた地名はいずれも昔は原野であった所に集落が出来たに違いない。又歴史的地名は尼寺、国分、城崎、鍵尼かぎに等に見られる。以下調査不十分であるがその幾つかについて述べてみよう。

### 1 久池井

昔は「朽井くち」と書いた。正嘉元年(一二五七)上佐嘉一带の領主高木氏に代って、国分次郎忠俊が朽井の地頭職しきになってから、その子国分季高(法名順光)もまた国分寺、朽井村の地頭職しきになっている。